

「野中千代子は気象学会の会員だった？」

—40年前に示された答*

山 本 哲**

1. はじめに

土器屋 (2018) により、「富士山測候所を活用する会」のホームページに「野中到・千代子資料館」が公開されたことが紹介された。野中 到 (1867~1955)・野中千代子 (1871~1923) 夫妻の事績は明治期日本の気象観測ネットワーク構築において、特に民間部門の役割を考える上でも意義深い事例であり、今回の資料館設立への尽力に敬意を表し、今後の内容のさらなる充実を期待したい。

さて、この中に「野中千代子は気象学会の会員だった？」というページがある (2018年 6月14日閲覧)。簡潔な疑問であるが、ジェンダーの視点から日本近代科学史を検討する上でも重要な問いである。このページでは藤部文昭氏による文献調査の結果が紹介されているが、「五分五分」ということで、結論を得ていない。これについて、一定の結論を得たので感想を含めて報告したい。

ここで二人の名前表記について述べておく。千代子の戸籍名は「チヨ」である (大森 2006) が、公になっている著作等ではすべて「千代子」であり、これを通称として使用したと思われる。「チヨ」の用例は見当たらない。他方、到については「到」「至」の2つの用例があり、「到」が戸籍名、「至」は筆名とされてきた (大森 1978など) が、1901 (明治34) 年頃まで自身「至」と思い込んでいたと81歳のときに語っている (山と溪谷社 1949) ことがわかった。ただし、か

なり後年になってからの口述をインタビューアーが記録したものであることには留意する必要がある。本稿では原則的に原典記載の表記に従う。千代子 (チヨ) に関しては通称の「千代子」、到に関しては「到」「至」の複数の表記が用いられることをご理解いただきたい。

2. 藤部文昭氏の調査

藤部文昭氏は土器屋氏の問題提起にこたえて広範な文献調査を行った。調査結果の要点を述べておく (2018年 6月14日現在の上記ページから。なお、括弧内の註として筆者の補足説明を加えた)。

- 1895 (明治28) 年の気象集誌 (第1輯第14巻第10号 p.529-530) に、「野中千代子の通信」という表題で、千代子の入会希望の手紙 (註：中央気象台予報課長/大日本気象学会幹事の和田雄治宛) が載っており、千代子が入会を求めたことは事実と考えられる (註：和田雄治は野中の理解者であり、富士山の冬季観測に中央気象台が測器を貸与し、到に観測を囑託した (野中 1901 ; 大森 2006) のも和田の尽力によると思われる)。
- 新田次郎「芙蓉の人」にも上記の手紙がほぼそのまま載っており、この後、千代子が到から「気象学会への入会金が返送されてきた (註：和田雄治から)」、「気象学会の理事会にかけたところ、しばらく延期することになったそうだと告げられる場面があるが、これが事実なのか、新田次郎の創作なのか不明。娘の死の時期など、もとより「芙蓉の人」には創作と考えられる部分が多い。
- 1955年の「天気」掲載の佐藤順一による野中 到の追悼文に、「(註：到が) 明治28年頃から千代子夫人と共に気象学会員になられておったが」と記述されている。しかし、「夫人と共に」が事実かどうかは

* “Was Chiyoko NONAKA (1871-1923) a member of the Meteorological Society of Japan?” - An answer has been offered forty years ago

** Akira YAMAMOTO, 気象研究所。
〒305-0052 茨城県つくば市長峰1-1

© 2018 日本気象学会

検証の必要がある。同文には「大正11年の末千代子夫人流感にて逝去」とあるが、これは実際の逝去時期（1923年＝大正12年2月）とは違い、佐藤氏の記憶の不確かさを示唆。

- ・1923年の気象集誌に掲載の総会記事があるが前年度の会員物故者に千代子の名前は無い。
- ・明治から大正にかけての学会事務に関する「気象集誌」（第1輯）の記載内容は頻繁に変わり、会員入退会もすべてが掲載されているわけではない（注：当時「天気」はまだ刊行されておらず「気象集誌」は現在の「天気」のような機関紙の役目も持っていた）。
- ・現在の気象学会の事務局に当時の事務書類が残っている可能性は無い。

3. あっさり出た答、そして

以下、筆者の調べを述べる。それまで見つかった資料のうち、千代子の入会願への気象学会の対応について記述があるのは新田次郎の小説「芙蓉の人」（雑誌初出：「太陽」1970年1月号～1971年3月号。単行本1971年5月芸春秋刊）だけであった。この小説の作者によるあとがきには、作者新田が野中 到の遺族が所蔵する資料を閲覧した旨が記載されている。新田は到の遺品の中に千代子の入会延期を告げる和田から到宛の手紙を見たのかもしれない。土器屋氏がご遺族と懇意にしておられるということで訊ねていただいたが、遺品の整理はこれからのようで、ただちに確認は難しいようであった。

他に、平凡社ライブラリー「富士案内・芙蓉日記」（大森 2006）の編集にあたった大森久雄氏が、野中氏の遺族と接触していることを同書のあとがきで知った。幸い平凡社の紹介で、氏と連絡を取ることができた。大森氏からは「至、千代」の名前が1895（明治28）年12月の大日本気象学会会員録に載っていることを確認し、野中 至『富士案内』の復刻にあたり執筆した解題（大森 1978）の中で指摘した旨のご教示をいただいた（「千代」は戸籍名に沿った記載と思われる。また「至」の表記は、これを戸籍名と認識していたことを裏付ける。実際、確認できた範囲では1900年（明治33年）までの会員録の記載は「至」に、1904年（明治37年）以降は「到」になっている）。

表題の問いに対する答えはあっさり出てしまった。それはすでに40年前に示されていたのである。野中夫妻を継いで民間人として富士山頂通年観測に挑んだ佐

藤順一のこのことに関する記憶は正確であった。

千代子が1895年（明治28年）12月の会員録に掲載されているとすると、千代子の入会願の「通信」の日付が同年10月8日、夫妻が山頂小屋から救出され下山したのが12月24日であるから、「延期」もなにもない、千代子が和田宛に「通信」を送り、到とともに富士山頂の小屋にいる間に、千代子の入会願はただちに認められたことになる。

大森氏の取材記録では、大森氏が当該会員録を閲覧されたのは国立国会図書館のようであるが、筆者はまだ見つけることができていない。その代わりその前後の1894（明治27）年12月および1896（明治29）年12月の会員録は見ることができた。前後の発行状況から1895年12月も会員録が発行されたことは確実である。1896年12月の会員録にも「通常会員（在東京）」として「野中 至」「野中千代」の名前があった。（大日本気象学会会員録は当時の「気象集誌」の附録として発行されていたが、総目次には掲載されないためか、長期保存のため国立国会図書館・気象庁図書館など所蔵機関が刊行1年分ごとにまとめて行う製本で多くの場合省かれた（稀に含まれることもある）。今回、両図書館などで所蔵の製本された「気象集誌」を閲覧したが、明治28年12月の会員録を見つけることができなかった）。

さらに、千代子入会以前の、1894年12月現在の会員録にすでに女性と思しき名前が複数認められた。千代子は「通信」の中で「もし気象學會に婦人の入會御差許被下間敷や」としたためだが、千代子が知らなかっただけで、すでに大日本気象学会は男女問わず会員として受け入れていた。小説では学会入会が「延期」とされたことに、千代子が「きっと私が女だからという理由なんでしょう。」と和田雄治を非難して怒りを爆発させる場面があるが、こうしてみるとこれはまったくの創作と考えられる。

千代子は登山直前、何故に学会への入会を求めたのであろうか。以下は筆者の推測である。前述のとおり到は富士観測にあたり気象測器を中央気象台からすべて貸与され、観測を囑託されていた。まったくの私人である到にそのような支援を与えるには大日本気象学会員という肩書が必要だった。千代子も観測に加わる以上、学会員であることが必要と感じたのであろう。和田は受け取った千代子の手紙を即座に（10月8日付の手紙を10月号の）「気象集誌」に全文そのまま掲載するという異例の対応でその気持ちに応えたのである。

4. おわりに

新田次郎「芙蓉の人」は感動的な小説であり、筆者を含めこの小説により野中夫妻の偉業を知ったという者は多いだろうし、その功績は高く評価されなければならない。しかし、小説は多少なりとも演出が入り、歴史的事実の証拠にはなりえない。その意味で大森(1978)はたいへん充実した報告である。大森氏は執筆に当たり国立国会図書館・気象庁図書館にも何度も通い、多くの資料に目を通し、野中夫妻や和田雄治執筆のものはもちろん、新聞報道なども細かく参照して取り巻く社会の動向まで記録した。小説の虚構も具体的に明らかにしている。たとえば小説では千代子が冬季越年観測のため到とともに登山することはほとんど身内以外には秘密にしていたことになっているが、実際は新聞報道などを通じて到の登山前からすでに世の中に知られていた。こうした歴史的事実を知って野中夫妻の偉業を振り返ると、おそらく小説とは少し異なる印象を抱くのではないか。小説では男尊女卑の明治の男性の見本のように描かれていた和田雄治についても、少し違った見方ができそうである。

また、藤部氏の調査にも敬意を表したい。図書館で「気象集誌」を始め数百ページは優に超える文献に目を通されたはずである。気象集誌は全ページの電子アーカイブ化されており検索は容易なのではないか？と思われた方も多いと思うが、そうではない。当時の気象集誌記事は「本会記事」「中央気象台録事」「論説」「雑録」「雑報」などに大別されるが、「千代子の通信」を含む、学会の日常活動などを記録した「本会記事」や「雑報」は電子アーカイブ化されていない。気象集誌の電子アーカイブ化は学会創立125周年(2007年)にあたり科学技術振興機構のアーカイブ事業を利用して行われ、当時のJ-STAGE登載・公開基準の関係かと思われる。しかし現在の基準では大会プログラム等の二次資料や学会行事予定・記録等の学会記事は掲載がむしろ推奨されている。本件でもわか

るとおり、こうした記事も、100年後には歴史的に大きな意味を持つてくることがある。またの機会があれば、現在電子化公開されていないページも含めた全ページの電子アーカイブ化がなされ、貴重な資料へのアクセスがより容易になることを望みたい。

日々の活動を忠実に記録し文書に残すことは、これからの時代を切り拓く未来の人たちへの贈り物である。折しも学会ホームページで「日本気象学会75年史」のPDF版が公開された(2018年4月9日、http://www.metsoc.jp/msj_history_75_years_1957.pdf)。会員の間でもあまり知られていなかった冊子と思われるが、容易に閲覧できる機会が提供されたことはたいへん喜ばしい。これから気象学会の発展に寄与する人々には本冊子からも多くの贈り物を受け取って、それを今後の気象学の発展に活かして欲しいと願う。

謝 辞

大森久雄様にはご自身の調査に関する多くのご教示や貴重な資料のご提供をいただいた。深く感謝申し上げます。本研究はJSPS科研費JP17K01184の助成を受けた。

参 考 文 献

- 土器屋由紀子, 2018: 「野中到・千代子資料館」をホームページにオープン. 天気, 65, 366.
- 野中 至, 1901: 富士案内. 春陽堂, 156pp (国立国会図書館デジタルライブラリー. <http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/765277>, 2018年6月14日閲覧).
- 大森久雄, 1978: 野中 至『富士案内』(明治三十四年八月春陽堂刊). 新選覆刻日本の山岳名著 解題, 日本山岳会編, 大修館書店, 129-151.
- 大森久雄編, 2006: 富士案内 芙蓉日記 (野中 至・野中千代子著). 平凡社, 256pp.
- 山と溪谷社, 1949: 野中到インタビュー. 山と溪谷, (126), 38-44.